# 大鹿スケッチ

— 第 31 号 —
〈 発行 〉
前志満　くみ
〈 提供 〉
旅舎 右馬允

暦の上では春を迎えましたが、今年は数年に一度の寒波到来。小気味良い寒さが続きます。それでも、雪の下にはフキノトウ、クロッカスのつぼみが膨らみ、寒さの中にも春の息吹を確かに感じられる今日この頃です。近くの桜の冬芽も観察していますが、樹木の目に見える春の変化はもう少し先のようです。寒波到来の季節の境目2月3日はマイナス15度を記録。

## ●典山に南北朝のかほり●
## ～釜沢集落の新年行事特集～

寒さ厳しい南信州の冬は、人が紡いできた「温かい想い」をいっそう感じることのできる季節でもあります。大鹿村では1月14日の夜に行うのが伝統で、村内各集落ごと盛大に行われました。全国広く行われる小正月の火祭り行事「どんど焼き」は、一年の健康を祈願するほか、伊那谷の多くの地域で「勢（性）の神」といわれ、子孫繁栄を祈願する行事です。今年は、大鹿村の最遠集落「釜沢」（かまっさわ）のどんど焼きを訪ねました。釜沢は「大鹿村騒動記」の舞台となったディアイーター脇から小渋川の上流を目指して車を走らせること約15分、南アルプスを間近で臨める谷合の集落です。神々しい山並みに囲まれた釜沢を「日本のチベット」とたとえる人も少なくありません。南北朝のころは、後醍醐天皇の第八皇子、宗良親王が居を構え東国戦略の拠点とされていたという歴史の色濃い地域で、今でもその名残か、方言の中には「朝廷ことば」が含まれているそうです。釜沢の急峻な地形には民家や畑が点在し、河原近くの平らな場所には田んぼもあります。集落には、お店も、ポストも外灯もなく、一見、便利とはいえないところですが谷合の荘厳な自然の魅力に引き付けられて国内外から移り住む人も多い人気のスポットです。かつては30戸ほどが軒を連ねていましたが、現在暮らすのは12戸21人。その中のおよそ半数は移住者です。そんな過疎が進む釜沢で受けつがれている「どんど焼き」は全国的に見ても珍しいと言われる「床上げ式」の型をとります。よく目にするのはオカリヤ（竹などを組み立てて、藁やその年飾った松飾を縛り付けたものを釜沢ではオカリヤという）を作りつけて点火しますが、釜沢のどんど焼きはオカリヤを火元に人の手で吊りあげて点火します。よって竹の骨組みのバランスは重要になってきます。少し離れて竹の骨組みのバランスをみる人、竹を縛り上げる人、それを支える人、材木を使いやすいように整える人、集落に暮らす20代から80代の老若男女が力を合わせます。出来上がったオカリヤ様は村内の他集落と比べると小じんまりとしていますが、品の良さを感じます。また集落入口の変化に伴ってリサイズできるというメリットも感じられました。

午前中にオカリヤ様を作り上げるとお神酒を頂き解散、どんど焼きが始まるのはあたりが暗くなった午後6時半。炎が長く、高く燃えるとより縁起がいいといわれます。集落の住民他、普段は離れて暮らす親族もそろってお酒を酌み交わし会話も弾みます。1年の健康を祈ってお餅を焼いて頂き、燃え残った松をもちかえり屋根に載せておくのが釜沢の習わしです。

## ☆「20正月行事」☆
## ～ おふだん ～

かつては20正月の行事だった「おふだん」。現在は20日に近い日曜日に行われています。この「おふだん」という行事はおよそ江戸時代中期ごろから続く風習の一つで不平、不満、不作など「不」を断ち切るといった意味が込められ、悪いことのない良い世の中になるようにと行われてきた仏教行事です。飯田下伊那の各地で今でも続く風習で、所によってはお盆や、夏場の雨乞いとして行う所もあるそうです。大鹿村内でも、作製時期を同じくする木製の仏像が安置されている各お堂で其々行われていましたが現在は釜沢で行われるのみとなりました。かつては釜沢の青年団が主体となって行っていましたが、今は自治会で行っています。朝9時に宇佐八幡様の社務所に集まると女性はお供え用の米粉のお団子づくり、男性は折り紙で造花を作りお供えします。そして安置されている仏像を前に般若心経を唱えクライマックスは車座に座りなおして、長さ6メートル余りの大数珠を広げ「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」と唱えながら30回（本来は108回）回し仏様の供養と無病息災、五穀豊穣、大願成就を祈願しました。

不断の花（写真左）は神棚に春先まで預けておき春先、種を蒔いたら畑にさしますそうすると虫がつかないとされます。

## 大鹿 HeatBeat
～大鹿の人々～　第27回
紙谷　正　さん　（86）

このコーナーでは、季節ごとの風景と共に大鹿人の生活をご紹介します。淡々とした日々の中にも輝く、熱く響く「鼓動」をお届けします。

残雪の堂垣外（どうがいと）の田んぼが見渡せる紙谷さんの畑。もみ殻をふかふかにもった室の上は雪もなく、いつでも大根を出せるようになっていますが、その周りの畑の敷地にはまだまだ雪が残っています。畑の雪の上に砂が播かれているのは、雪を溶けやすくさせ、農作業が季節と共に始められるようにするのと、新しい土を追加する役割があるようです。春分を少し過ぎた大地は、まだしがカチコチに凍っていますが、いち早く動き出すのも大地です。少しの日差しの違いを感じ取って畑に立つのも、もうそれほど先のことではありません。

釜沢に外灯が一つもないのは、自然の美しさを一番受け取れるからという集落で暮らす人たちの思想の表れでもあります。大阪から移住されてきて今年で釜沢生活2年目となる谷口さんは1年間の釜沢での生活を振り返り「昔から人々が自然に支え合って暮らしてきた事を感じました。今年はお世話になった方にお返しもしていきたいです」とお話しされていました。現在、釜沢で暮らす21人中半数は移住者。包容力のある釜沢の雰囲気は来るものを拒みません。移住してきた人も自然に、先人が紡いできた思いに共感し、それを受け取ったという地域性を作り上げてきたように感じました。